

地域ニュース

痛み学入門講座

◆ 78 ◆

芸術と「痛み」

古今東西、さまざまな「痛み」に悩まされ続けた芸術家は少なくない。彼らが残した作品を改めて鑑賞してみると、その苦悩が見え隠れする。

まずはメキシコの女流画家フリーダ・カロの自画像である。「折れた背骨」を取り上げる。20世紀初頭に革命前夜のメキシコに生まれたカロは、6歳で「ポリオ（小児まひ）」にかかり脚が萎縮した。さらに18歳の時には、交通事故に巻き込まれて背骨や骨盤を骨折、鋼鉄の手すりから腹部を貫通した。

この事故により「脊柱固定術」（彼女が自画像に描いたひび割れた背骨が痛々しい）を始めとする手術を30回以上受けることになるが、泣き叫ぶほどの痛みが軽くなることはなかった。麻薬に溺れながらも絵筆を離さず、自らの痛みを描き続けたのである。

この自画像からは「脊髄損傷後疼痛」、「フェイルドバック症候群」（脊椎手術後の痛み）などが関わっていたことが推測できる。

ルノワール 関節リウマチに苦しむ



印象派の画家ルノワールは、その晩年、「関節リウマチ」による痛みで苦しんだ。年を重ねるほどに彼の作品はぼろ色の輝きを放ったが、利かなくなったり手に絵筆を縛りつけて、キャンバスに向かったのである。このような経緯から、1977年発行の「リウマチ学教科書」の表紙には、ルノワールの肖像画が飾られている。

音楽の世界でも、多くの作曲家たちが痛みで苦しむつ、作品を残してきた。たとえば、シューベルトは当時、不治の病とされていた「梅毒」（末期には神経が障害されて強い痛みを生じる）に苦しみながらも多くの作品を残した。友人との往復書簡にある「吹出物のために坊主刈りにした髪……」「例の頭痛がまた襲ってきて、僕を苦しめる」とのくだりからはその苦悩が読みとれる。



森本昌宏（もりもと・まさひろ）
大阪なんばクリニック（06・66648・8930）本部長・院長。平成元年、大阪医科大学大学院修了。同大講師などを経て、22年から近畿大学医学部麻酔科教授。31年4月から現職。日本ペインクリニック学会名誉会員。

彼がこの梅毒を意識しはじめたころに書いた弦楽四重奏曲「死と乙女」を聴くと、生と死のはざままで悩みつつも自己の人生よりも意味のある感動、さらには癒やしを与えようとする姿勢が伝わってくるだろう。

加えて、演奏家たちを悩ませている痛みがある。ピアノストたちを悩ませる指の痛みを伴う「死と乙女」を聴くと、生と死のはざままで悩みつつも自己の人生よりも意味のある感動、さらには癒やしを与えようとする姿勢が伝わってくるだろう。

シューマンが鍵盤楽器奏者として世に出たころ、バロック音楽に欠かせないクラビコードとハープシコードにピアノが取って代わったことから、シューマンは演奏法の変更を余儀なくされ、猛練習を重ねた。これがたまたま手の神経（後骨間神経）を傷め、演奏活動を断念して作曲に専念するようになったのだ。

シューマンは多くの素晴らしい作品を残した。その偉業が手の痛みで起因していたとは皮肉ではある。

第1日曜日に掲載します。